

ゆざわジオパーク ジオサイト案内書 6



水をたたえる貝沼

みなせ
皆瀬／

ジオサイト10



いなかわ

こまがた

稲川／**駒形**

ジオサイト11

ジオサイト12

皆瀬の湖沼群と歴史ある伝統産業

湯沢市ジオパーク推進協議会

ジオサイト紹介

1 0 皆瀬



皆瀬の湖沼群(こしょうぐん)は5つの沼があり、火山活動でできた斜面が地すべりを起こしてできた沼だと言われています。沼の背後には弓なりにすべり落ちた急斜面があります。

1 1 稲川



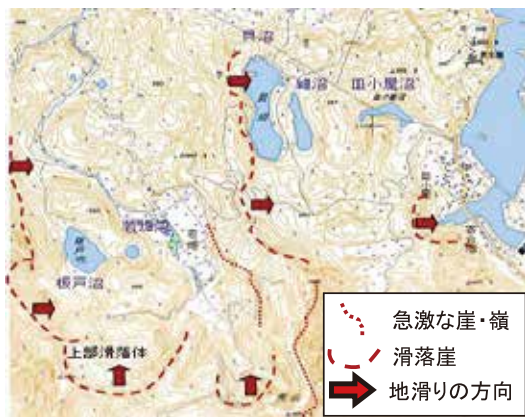
稲川には、川の浸食と隆起によってできた階段状の地形(河岸段丘)が皆瀬川の両側に発達しています。日本3大うどんの一つである稲庭うどんや川連漆器などの産業で栄えました。

1 2 駒形



駒形には鉱山跡が3か所あります。これらの鉱山の成因や開かれた年代は様々ですが、同じ火山によってできたと考えられています。

みなせ こしょうぐん
① 皆瀬の湖沼群 (地滑りで出来た5個の湖沼群)



湖沼群周辺は約 116 万年前の火山活動による岩石におおわれています。

地滑りでできた沼は左の地図にある板戸沼(いたどぬま)・若畑沼(わかはたぬま)・貝沼(かいぬま)・細沼(ほそぬま)・皿小屋沼(さらこやぬま)の5つとなります。

いたどぬま
○板戸沼



板戸沼の水深は、沼の中央付近で約 21m あり、湖沼群中最深です。生物、植物、環境が良好な状態で保存されており、環境アセスメント日本の湖沼調査で自然度全国第2位となっています。

この近くには、標高 762m の奥宮山(おくみやさん)や、標高 669m の兜山(かぶとやま)があります。

さらこやぬま
○皿小屋沼



皿小屋沼は、農業用水の貯水池として利用されています。

この沼には、以下のような伝説があります。昔この地に三浦徳兵衛という豪農がいて、そこに美しく優しい佐太子(さたこ)という女中がいました。ある時佐太子が誤って家宝の皿を割ってしまい、怒った主人に裏の沼を 10 回泳ぎ回るよう命じられましたが、途中で力尽きて死んでしまいました。その後、三浦家は没落、村人はたたりだと噂しました。この沼が佐太子沼とよばれ、地名にちなんで皿小屋沼と名付けられました。(民話の解説板より)

②水の利用（皆瀬ダム・板戸ダム・羽場のずい道）

みなせ はつでんしょ ○皆瀬ダムと発電所



皆瀬ダム湖

皆瀬ダムは洪水調節、灌漑（かんがい）、発電用として昭和38年（1963年）に作られた表面遮水（しゃすい）壁型ロックフィルダムです。

皆瀬発電所はダムの隣にありダムの完成と同時に発電を始めました。（下流には板戸ダムと板戸発電所があります。）

はば どう ○羽場のずい道

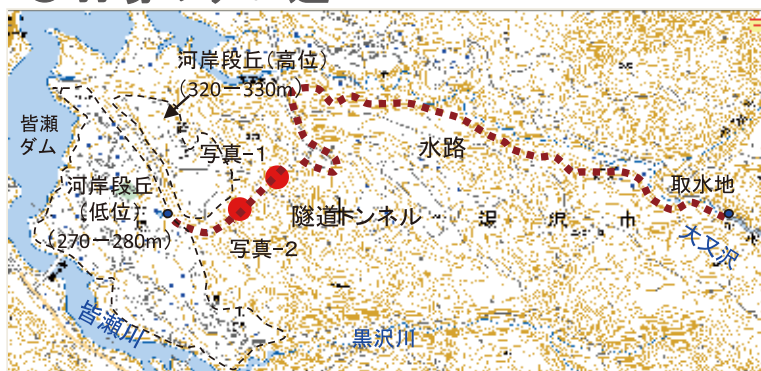


写真-1 羽場のずい道内部



写真-2 羽場のずい道出口

羽場集落の河岸段丘は、低い段丘面でも標高270m～280mに位置し、皆瀬川や黒沢川の川底より約50m高い所にあります。そのため皆瀬川や黒沢川の水を直接利用できず、灌漑（かんがい）用水が必要でした。

皆瀬はダムや湖沼群、皆瀬川等、一般的には水が豊富な地域ですが、地形的制約（V字谷、河岸段丘）で羽場集落のように水の確保が難しい集落もありました。

今から約200年前、山を遠巻きにした水路は全長4kmあり、雨などでしばしば災害にあいました。そのため、大正9年（1920年）に3年を要して水路用ずい道を作りました。測量技術のない時代、磁石と勘だけが頼りでした。羽場のずい道は、生活用水、稲作の水の大切な供給路です。

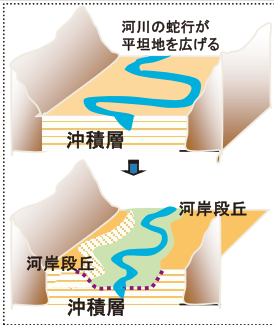
いなかわ かがんだんきゅう ゆうすいぐん

③稲川の河岸段丘と湧水群

○段丘面が三段ある河岸段丘

現在の皆瀬川から見た右岸（東側）

河岸段丘面



稲川の平地は、皆瀬川によって運ばれた泥や砂などが堆積した南北に長い平地です。皆瀬川は稲川に入ると、上流の渓谷（急流）から解放され広い平坦な原野をゆるやかに流れ、泥や砂などの堆積層を作りました。その後、長い年月の間に、川の流域が隆起を繰り返し、その間、川がこの堆積層を階段状に削り、河岸段丘を作りました。段丘面の数やその高さの違いは、隆起運動の回数とその隆起した大きさを示しています。

○稲川地域（稲川 1 1・駒形 1 2）の湧水群



湯沢市には、雄物川、役内川、皆瀬川、高松川と 4 つの大きな河川が流れており、水量が豊富です。また、市内の各地に湧水があり、稲川地域だけでも 30 か所以上あります。湧水が多い理由は、次の通りです。

- ①三方向が山に囲まれている。
- ②山岳部は 3m を超える積雪がある。
- ③山岳部には豊かな森林があり、水を溜めこむ。
- ④山は火山岩で出来ており、岩には隙間・割れ目が多い。


かんきよしみず
①関居清水

かわつら いわしみず
②川連の岩清水

にしかわつら しみず
③西川連の清水

おおすぎしみず
④大杉清水

- ①は広沢寺（こうたくじ）の側で江戸時代のもの。
②は川連城址の側の山の中（源義家伝説がある）。

- ③は西川連集落の神社の側
④駒形の高村集落の北はすれ、杉の木の下にある。
（大杉の切株あり）

④稲川の歴史と産業

○稲庭城



北側の仙北平野方面

稲庭城は皆瀬川の東側、稲庭の町並みの南端の標高約350mの山の上にあります。

ここは小野寺氏が最初に築いた城で、ここを拠点にして雄勝・平鹿を領土とする戦国大名になりました。

周辺の地質は、約2000万年前の火山噴出物で、岬のように西に張り出し急傾斜の山を作っています。

○小野寺氏の菩提寺（広沢寺）



元は『嶺通山前湯寺（れいつうざんぜんとうじ）』といい、1200年前に川原毛地獄にありました。それが三途川のそばに移り、やがて小野寺氏は菩提寺（ぼたいじ）にしたいとの願いから1459年に稲庭に移しました。

今の本堂は江戸時代のものです。

○川連漆器



○稲庭うどん



川連漆器の歴史は古く、約800年前に稲庭城主小野寺氏が、家臣の内職として武具に漆（うるし）を塗らせたことから、その技術が広まったと伝えられています。その後、日用漆器やお椀作りが始まり、更に蒔絵（まきえ）や沈金（ちんきん）などが施され、高級な伝統工芸品になりました。

稲庭うどんは、日本三大うどんの一つで、江戸時代初期に佐藤市兵衛が、手作りの干しうどんを作りました。

うどんは小麦粉・水・塩を使って作ります。かつて小麦粉は河岸段丘の上でとれたもの、水は豊富な湧水を使っていました。

⑤ 鉾山から果樹園へ



駒形では江戸時代を中心に大倉鉾山、来田鉾山、白沢鉾山などが開かれていました。鉾山の形成年代や成因には、複数の説があります。

ここでは、鉾山特有の公害問題がありました。

○来田鉾山



明治30年代に、地元の人が銀鉾を採掘していた記録が残っています。大正時代・昭和時代とそれぞれ休鉾、再鉾を繰り返し、銅などを採掘していました。

戦後は公害防止工事がおこなわれ、鉾山の場所は、ほとんど分からなくなってしまいました。

○白沢鉾山



ここは、江戸時代(1709年)に仙台出身の山師により発見された、との言い伝えがあります。

その後、佐竹藩の重要鉾山となり、大規模な操業が行われました。その時、鉾毒水問題が発生し、水路の改修やため池の建設が行われました。

その後、休鉾と再坑を繰り返し、昭和30年代始めに閉山しました。

○駒形りんごと大倉ぶどう



駒形の扇状地に作られたりんご園

明治29年(1896)駒形三又(こまがたみつまた)部落の茂木氏(もてぎし)が、りんごの木を植え、農業経営に果樹を取り入れる必要性を農家の人々に説き、品種改良や苗木の無償配布を行い、駒形地区でのりんご栽培が始まりました。

大正15年(1926年)大倉の村上氏がぶどうの栽培を始めました。その後、駒形果樹組合が設立され本格的に果樹栽培が行われるようになりました。

案内図

